

加藤周一のパリ—思索提遺遥

立命館大学特任教授 中川成美

1 加藤周一(1919-2008)とパリ(主に『続羊の歌』から)

1936年、第一高等学校入学理科乙類入学、フランス文学の片山敏彦(1898-1961)、国文学の五味智英(1908-1983)の授業に出席して文学に親しむ。一高在学中に横光利一(1898-1947)の講演を聴いて、学生との間に激論が交わされる。1940年、本郷(東京帝大医学部)に進学し、辰野隆、中島健蔵、渡辺一夫らのフランス文学の講義も受講するようになり、森有正、三宅徳嘉らの助手とも親しくなる。フランス語は独学。1942年、中村真一郎、福永武彦らと「マチネ・ポエティック」を結成。1946年、雑誌『世代』(1946・7~1953・2、全17冊、目黒書店、のちに書肆ユリイカ発行)に戦後寄稿。『ある晴れた日に』(『人間』、鎌倉文庫、1949・1~8)を発表。「文筆を業として医を道楽とする生活」(『続羊の歌』)に入る。「知的訓練における日本の『遅れ』」(同)を感じ、1951年戦後第二回のフランス政府給費留学生の試験を受験、半給費生として採用される。1951年11月に飛行機で渡仏、シテ・ユニベルシテ内のメゾン・ド・ジャポネ(日本館、薩摩館とも)に落ち着く。前年に三宅、森は来仏、親しく交際した。このほか、高田博厚(のちに加藤の小説『運命』にモデルとして現れる)、朝吹登水子らと交際し、朝吹からルネ・アルコスを紹介され(朝吹にアルコスを紹介したのは高田博厚)、のちに下宿を移した。住所は91 rue de l'Amiral Mouchez Paris 13e。アルコスと亡くなった息子の妻・ミシェルとの交流が始まる。アルコスは20世紀初頭にデュアメルらとアベール派を作った詩人。当時は出版社を経営していた。1952年ニースで開催された第24回国際ペンクラブの大会に同道、田村泰次郎や平林たい子と会った。このほか、梅原龍三郎と志賀直哉は訪欧中に交通事故にあい、その処置に出向いたこともあった。ヘルシンキ・オリンピックの実況放送に渡欧していたNHKアナウンサー・和田信賢が病を得て、パリに来た折も、日本語のわかる意思をという和田の希望で診察したが、重篤な状況ですぐに入院させたが、和田はすぐに亡くなった(山川静夫『そうそうそうなんだよーアナウンサー和田信賢伝』、岩波現代文庫2003)。この折、NHK支局長の手配で世話した看護婦エレナ・ハンセンと知り合い、のちに小説『人道の英雄』(『文藝』1955年9月号)に彼女の経歴が取り入れられる。

1952年10月にイタリアを旅行し、フィレンツェでオーストラリア人ヒルダ・シュタインメッツと出会う。のち、ロンドンのシティに就職したヒルダを追って、ロンドン・アールズコートの下宿屋に滞在する。c/o Mr. Kerpner 26 West Cromwell Road, Earl's Court London S.W5。数カ月を過ごし、経済的な問題からパリに戻る。外国人労働許可証を取るが、「しかし滞在の二年にも及ぶ頃から、相手の奥行がとめどもなく深く、そのなかに入ってゆくと、深淵に吸い込まれていくように、遂に出口がなくなるのではないか、という気がしはじめた。その考えには、目眩というか、ほとんど戦慄に近い感じが伴った。」(『続羊の歌』)という感慨に襲われる。当時、フランスで仕事をするためには特殊な能力を要求された。その事例に加藤は石井好子を挙げている。このほかにカナダの外交官・ハーバート・ノーマンとの交流も見逃せない。ノーマンは加藤に英文学を伝えるが、朝吹もまた戦前期の軽井沢でノーマンと交流を持った。中村真一郎の証言もある。

そのために帰国を決意、1955年3月に帰国した。この後、フランスには定期的に来訪。1985年フランス芸術文化勲章シュバリエを、2000年レジオン・ドヌール勲章を授与される。

2 森有正(1917-1976)の思索的立場

パリには僕にとって何かどうにもならない、密度の高い、硬質のものがある、という感じだった。そしてパリの方は僕を全然知りもしないし、必要としていないのだという感じだった。(『バビロンの流れのほとりにて』、筑摩書房、1968)

私にとって重要なことは、このパリ滞在の間に、私自身の思索が始まったということである。

(『セーヌの辺で』毎日新聞社、1977)

3 『人道の英雄』

モンパルナスで偶然知り合った北欧から来た美しい娘・ブリギットと「私」はやがて親しくなる。彼女は、アフリカで献身的な医療奉仕をするS博士に心酔し、彼のもとに赴くことを決意して、「私」から離れていく。彼女から定期的に絵ハガキや手紙を繰るようになり、「私」もその返事を書くことを楽しみにした。だがやがて通信は間遠になり、「私」にも新しい女友達ができたり、多くの友人たちとの交友で忙しくするようになった。第4共和政下の植民地問題がフランスを覆っていたこの時期に、「私」は時々ブリギットのことを思い出した。しばらくして一通の長い手紙がきた。そこには人道家として高名を誇るS博士の生々しい俗物性をつげる彼女の絶望が語られていた。二年の時期を彼女はアフリカで過ごし、5月の美しいパリにブリギットは帰ってきた。面やつれした彼女の二年の経験の過酷さを想像するとともに、彼女が一つの貴重な体験をわがものとしたことを「私」は確信する。またパリを出ていく彼女を停車場まで見送り、「私」は深い感慨に浸った。

★「植民地帝国の国民が、植民地において、病院を経営するときには、「聖者」になるよりまえに、植民地帝国主義そのものに対する見解をはっきりさせる必要があると思う(中略)そして植民地帝国主義こそは偽善の体系であり、個別的な善意を、その体系から引き離すことが、体系そのものに挑まずにどうして可能であろうかとも付け加えたかもしれない。(『続羊の歌』)

4 朝吹登水子(1917-2005)、石井好子(1922-2010)

明治財界人・朝吹英二は福沢諭吉の姪・中上川澄と結婚、常吉をもうける。常吉は三越や帝国生命社長として活躍した実業家であり、陸軍中将・長岡外史の長女・磯子と結婚、5人の子女を得た。長男・英一は音楽家、三男三吉はフランス文学者、ユネスコ文化局次長、四男・四郎は建築家、長女登水子は翻訳家、文筆家として業績を残した。三吉の妻は石井光次郎の長女・京であり、京の妹がシャンソン歌手、音楽事務所社長として活躍した石井好子である。京、好子の母方の祖父は実業家・久原房之介である。

登水子は戦前期にフランスに留学したが、戦後再度オートクチュールの資格を得るために1950年に娘由紀子とともに渡仏、やがて森有正の薦めでフランソワーズ・サガンの翻訳をはじめ、シモーヌ・ド・ボーボワールの翻訳で広く知られるところとなった。サルトル、ボーボワール訪日時は随行したが、パリで深い交友を結んでいた(『愛の向こう側』1977)。また石井好子は戦後ジャズ歌手となったが、1950年再度勉強のためにサンフランシスコに留学、翌年パリに渡りすぐにシャンソン歌手として仕事を心得、ヨーロッパのエンターテインメント界で活躍した(『ふたりの恋人』1959)。

5 サルトルへの信頼

★サルトルにとって、小説は人間の具体的現実的な現在の表現でなければならない。(「サルトルの位置づけ」、『展望』、1949・1)

★サルトルの仕事の独創的な意味は、哲学を人間の「全体」に関する学として定義することにより、そのような人生の必要に応えようとした点にある。(「人間学または『状況第九』の事」、『朝日新聞』、1976・8・6)

★(1950年代初めに労働者の不当逮捕に反対する集会でのサルトルの演説に接した経験から加藤が感じたサルトルについて)サルトルの話し方は、状況の一話し手と聞き手のおかれた状況の緻密な分析へ聞く者をひきこむ。感情の昂揚から施行の過程へ。彼は語りながら考え、われわれは聞きながら考える。そのときそこで私はひとり哲学者に出会った、あるいは、常にいかなる状況の中でも断乎として徹底的に考えぬく一個の人格に。そのときのサルトルは実に精悍にみえた。(「サルトル論以前」『加藤周一著作集2 現代ヨーロッパ思想注釈』、平凡社、1979・10)

結 滞欧経験日本人知識人の系譜と断絶

参考図書：鷲巢力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか—『羊の歌を読みなおす』岩波書店、2018』、海老坂武『戦後思想の模索』(みすず書房、1981) など